

<昭和57年>

9/20

区制50周年
特集号

発行：東京都豊島区

編集：企画部広報課

豊島区東池袋1-18-1
〒170-00981-1111



みんなできずく
生活文化都市としま

広報 てしま

半世紀を迎えた 豊島区



江戸の時代であつたころ、町なかの人びとは、秋は染井の楓、冬は目白不動境内の雪見や鬼子母神の節分、春は雜司ヶ谷の梅林、染井のつつじや桜、果鶴の卯の花、夏は高田・姿見橋の螢などと季節をもとめて杖をついた。区内の、それぞれが、町なかに住む人々たちのクリーエートの地であった。

ここに植木屋の村であつた染井は、江戸人の絶好の植物園であり公園であり、遊園地でもあつた。また池袋村・長崎村は、明治・大正のころまで典型的な武蔵野農村で練馬大根やナスなどを始め東京向け（当時はそう言つた）の野菜生産や大根の漬物生産で、東京の台所を賄つた。

人口の増加で都心がしだいに窮屈になるにしたがつて、明治末年から大正にかけて環境のよい地区として、学習院大、大正大、成蹊大、豊島師範、大谷大、自由学園、立教大などが区内に広大な土地を求めて移り新しい学風をおこしてきた。

このころ、大正デモクラシーの思想的影響と関東大震災による住宅の郊外への進出によって、長崎に絵かき村が出現したり、文化人の居住所が増し、第二次大戦前のつかの間のひととき、池袋モンパルナスとなえて、自由を謳歌する余裕さえみられた。しかし、やがて祖国は廃墟と化した。敗戦、そして艦被の民は地上をはうようになってしまった。このヤミ市こそは、戦後ニッポンの思想・経済・政治をふくむすべての原点なのである。

池袋西口ヤミ市の盛況に応じてブクロという表現が生れた。この言葉にこめられた天国と地獄、聖俗の混沌とした情念の固まりのような語感のなかに、庶民のぬくもりと、したたかな強靭さがこめられているのである。

区域からヤミ市が消えてから10年余りの後、サンシャイン60と呼ぶ超高層ビルが、都域を圧してそびえ立った。

区内のさまざまできごとは、生れては消えていったが、それぞれの時代に、それなりの光芒を放して歴史的意味を遺していく。

これからも区域は絶え間なく新しいものを創造し、祖国に問いかけていくだろう。豊島区は活性にみち常に創造に向かつて飛びたつ若い街であることを、歴史は示している。

創造に向かって
飛びたつ若い街



区史編さん委員長
林 英夫

